通信第七十五号　浄土真宗のと摂取不捨

　毎月ベラルーシ法座の通訳をして下さっているオレグさん（オランダ在住）からご要望がありました。四月六日第三十一回目の終わりの時です、次回は浄土真宗の止観についてお聞かせください。「天台宗の止観とは異なっているようですね」。日本の門徒さんからそのようなご質問は聞いたことがありません。「オレグさんの方が詳しいのではないですか」と申し上げましたが「私も勉強させていただきます」と応じました。

　考えてみると、私は親鸞さまが比叡山で二〇年間、勉強され、ご修行された天台宗の勉強を一度もしたことがありません。辞典を開き調べてみると、「」を調べても複雑でよくわかりません。親鸞さまは常行三昧堂の堂僧として、阿弥陀様のご木像の周りをまわりながら念仏を称えるという行をされていたことは記録に残っています。要はこちらから瞑想したり、精神を集中してさとりの境地に到達する方法のようです。

　私の二十四、五才の頃。滋賀県米原の草庵で藤谷秀道先生のご法話をお聞かせ頂いて居た頃、「シャマタ（止）・ビバシャナ（観）広略修行してを成就せり」と九十歳に近い先生が渾身の力を込めて机をたたきながら叫ばれました。その迫力に意味は解らないけれど大切なことにちがいないな！と強く印象に残りました。その不思議な響きは今でも残っています。

　ふと思い出したことがあります。高光大船先生のお教えだったでしょうか。「仏法は鉄砲の反対である。鉄砲はいつも他を撃つ、さらに自分自身をも撃つ。仏法は死んだ魂をよみがえらせる。南無とは撃ち方が止まる。その時、向こうから、鳥の声や花や空、人の声が聞こえてくる、見えて来る」。

　三界、六道の穢土の中では見える鉄砲、見えない鉄砲の撃ちあいの日々です。なぜ、私たちに聞法が必要なのでしょうか。人間からは撃ち方がやまらないからです。「浄土の門が開いたら、地獄の門が閉じる。地獄の門が開いたら浄土の門が閉じる」と清沢先生の教えにあります。聞法のときは極楽浄土の門が開いている状態です。

　藤谷秀道先生とのご縁はわずか二年間でした。でも、月に何度も聞法に行かせて頂きました。職場で人間関係がうまくいかず、怒りの煩悩に支配されてどうにもならない時、藤谷先生のそばへ行き、聞法すると怒りが嘘のように消されていました。帰路「あの怒りはどこへいったのか」。跡形もなく消えていました。だから行かずにはおれなかったのです。

　先日、いつもは見ない「チコちゃんに叱られる」というテレビを何気なく見ていますと、どうして日本の小学校では生徒が掃除をするのかという番組でした。誰もわかりません。たどっていくと、お釈迦様の十大弟子のひとり、が登場したのです。彼は物覚えが悪くて、すぐに忘れてしまうのです。皆から馬鹿にされて、さとりを求めるのをやめようかとしょんぼりしていた時、お釈迦様に一本のを渡されて、「塵をはらいたまえ、を除きたまえと言いながら掃除をするように」と命じられました。毎日毎日繰り返すうちに、「これは人間の心の塵や垢を除く事ではないのか」と気づきました。そして「あっ、心の塵や垢は人間では消せない。消すはたらきがあるのが、お釈迦さまがいつも説いておられる法であったのか」と目覚められたのです。能力の劣り、頭の悪かった周利槃特が十大弟子のひとりに成れたのです。それで、彼のようになりましょうとの願いから寺子屋で子供たちが掃除をしていたのです。それが今まで受け継がれてきたということでした。

　仕事の不得手で人間関係を築けない私は心苦しく、劣等感にさいなまれる中で藤谷先生やそこに集う同行さん方にはたらいている仏法、本願のおはたらきのお陰で自分ではどうにもならない苦しみが不思議に消されていたのです。

　聞法は世間の動きを止めて、浄土の功徳を聞く、観る。すなわち浄土真宗の止観行であります。浄土真宗の寺は聞法の道場なのです。葬儀や法事は助縁であります。しかし、七百五十年という長い年月の間にさかさまになって来ました。

　さて、四月も岐阜本願道場、三重松林寺本願道場、愛知県刈谷本願道場とご法縁のお育てを頂きました。今回はトラブルがありました。先ず、岐阜、田中秀法さん宅のご法座が終わり、森はる美さん宅へ泊りに行く道中です。森愚英さんから電話があり「今日いつ頃着きますか」「ええ、松林寺さんには明日めて頂く予定です」「ええ、夕食等準備していますよ」前日の確認を忘れていたための事件です。次の日、が後に残らないように、と心配しながら電車をおりるとき、私のリュックサックが無いことに気づきました。はる美さんの車のトランクの中か、電車の網棚に忘れたのか自信がありません。中には車のカギやビデオカメラ、財布、真宗聖典、運転免許等々が入っています。今度はリュックのことで心配に覆われています。原因探しをしててる中、「如来さまのご計画通りには成っている」という声なき声が聞こえて来て不思議に落ち着かされました。真宗では如来さまのお計らいとか、ご思案とか、ご催促と言われてきたことです。

「氷点」などを書かれた作家の三浦綾子さんが次々に難病にかかられるとき記者の方が質問されたそうです。「どうして、あなたは次々と難病にかかるのでしょうかね」すると「神のご計画です」と言われたことが思い出されました。

輪読会の時、日田市の河野久美子さんが「大石先生も最近読んだところに書いていました。五十六信のところにあります」と教えてくださいました。

　　五十五信は「入院生活に思う」と題しました。入院によって私は大変貴重なお育てを頂きました。一番中心となったことは、願いがこれまでにも増して、鮮明になったことです。「縁ある人が助かってくれたら私が助かるのです」と、心の底から言い得たことです。

　　　人間関係のもつれの中で、人間は生きてゆかねばなりません。そのどんづまりの中からあふれ出て下さるのが仏様のご本願です。あふれ出て下さったらどうなるのか。蓮如上人のご（大谷派では）のお言葉を頂きます。

　　「無始よりこのかたつくりとつくる悪業煩悩を、残るところもなく願力不思議をもって消滅するいわれあるがゆえに、のくらいに住す・・・・」とやかくの言葉が要らないのです。一切皆空という世界が開かれ、この世の小競り合いの世界が幻影のように思えてきます。それならもう苦しみはないのか。富士山を苦しみながら登っても、富士山の威容を実感できるように、苦しんでも仏様のお救いの広大さを証明して下さるのです。～～～

こうしてみると入院生活をしたことも、仏様のおてもとではちゃんとご計画済みだったのでしょうか。何だか仏様にされ、使って頂いている気がします。

　大石先生が入院生活の中で、如来さまからの内観行と如来さまの本願のお救いを生活を通し、業を通して見せて下さりお育て下さっています。

結局、リュックサックは大垣駅に届けられ無事に帰ってきました。

　このたびの三か所の本願道場を通して一貫していたのが香樹院さまの教えとして、二十願の

人間心から人間を観る世界と十八願の仏智光明から人間を観るあり方の微妙の違いの大違い。

薄紙一枚の関所の後生の一大事を象徴せる次の歌でした。

　　松蔭の　暗きは月の　光かな

　お念仏は称えているのに自力の念仏のために人を責め、自分で自分自身を責めるという有り

様です。松の影を人間の自分が観ている有り方です。他力のお念仏は口に出ているのに、本当

に頭が下がり切れていないから自力の念仏と成って、明るくなれず苦しい日々です。如来さま

の智慧の光のお陰で自分の悪業煩悩が照らし出されているのに、深い無意識の自我から自分を

見て自分の影の闇を改善しようとしたり、打ち消そうともがいてしまうのです。仏智を疑って

いるわけです。如来さまのおはたらきを邪魔し盗んでいるから苦しいのです。

　親鸞さまが自力の念仏、二十願の問題として大事に教えてくださったご恩は計り知

れません。そこが転じられるとご恩報謝の念仏が出て下さるのです。

　親鸞さまのご和讃には

　　衆生のさとりにて

　　　無碍の仏智をうたがえば

　　　にて

　　　多功衆苦にしずむなり

 　　　　　　　　　　　　　 浄土和讃

自分が消えていないとすなわち人間の理解の頭が下がっていませんから有碍の闇の自分に帰らされるのです。無碍の仏智の本願に摂取されると光明土の浄土に自然に帰らされるのです。闇そのものが光が照らしている証拠であったのです。

　光に照らされた凡夫、悪人、罪悪深重、煩悩の衆生を助けんがための本願の光でありま

す。賢い人、偉い人、立派な人のための本願ではないのです。賢い人、立派な人、偉い人になってから救われる教えを聖道門と言われるのです。凡愚であるからこそ、煩悩があるからこそのご本願のお救いであります。炭が無いと火が燃えないごとく恐れや不安や怒り腹立ちねたむ心がひまなく起こる。身体が死ぬまで煩悩が起こるゆえに本願に助けられ続けられていくのです。のの歩みが始るのです。その人の全体の炭が尽きたらその人を救う本願のおはたらきもなくなる。御用が尽きたのですから生かしめて下さった光明土へ帰らせて頂けるのです。しかし、一切のいのちにはたらいておられるご本願のおはたらきは消えることはありません。

煩悩の固まりの心身が娑婆にある限り、煩悩のままに娑婆に踏み出していけるのです。親鸞さまは

いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　歎異抄二章

と呼びかけて下さっています。

ご本願のより処があるから、毎日の煩悩の真っただ中で二河白道です。浄土からのかすかな道です。でも、絶対他力の大道です。「どうなろうとこの道一つ」と大石先生に後押しされ、如来に引っ張られ、本願にのせられての日々が開かれて来るのです。

親鸞さまのみ教えに血が通ってきます。

　　凡夫というは、無明煩悩われらが身に満ち満ちて、欲も多く、いかり、はらだち、そねみ、ねたむ心多く、ひまなくして臨終の一念にいたるまで止まらず、消えず、絶えずと、水火二河のたとえにあらわれたり。かかる浅ましき我等、願力の白道を一分二分、ようようずつあゆみゆけば、無碍光仏の御こころにおさめとりたもうがゆえに、かならず安楽浄土へ至れば、弥陀如来とおなじく、かの正覚のに化生して、大般涅槃のさとりを開かしむるをとせしむべしとなり。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　一念多念文意　聖典五四五

　人間世界の常識の思いとは全くちがいます。親鸞さまの教えの方が真実なのです。

　二〇二四年　五月初旬

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝

　　　追記

三月二十六日から二十八日に御来寺下さった、滝本美恵子さん、松田敏美さん、

さんたちからそれぞれ礼状やお電話を頂きました。代表して松田さんの手紙を紹介させて頂きます。

　　～～～ずっと膝を交えて頂き、三日間本当に尊い素晴らしい時間を頂きまして他のお二人も大満足で意義深い時間を過されたことと思います。又、「思い立つ事があったらまた行かせてもらおうな」と申したことです。三日間話して下さった仏法が私の中で生きづいてくれています。先生のおっしゃって下さった、第一関門、第二関門。まだまだこれからです。聞法にはげみます。聞光道もよかったですね。円入さまにも大変お世話になりましたよろしくお伝えくださいませ。これからもよろしくご指導のほどお願い申し上げます。

合掌

　第一の関門で腰を下ろしてしまわずに、後半の半偈（捨身聞偈）へ歩みだして頂きたいという願いを受け止められたことが伝わってきて、私もうれしいです。お互いにそれでこそであります。

　前号でも紹介させて頂きました。大石先生の十七回忌をご縁として、「生きていてよかった」・「念仏の親子」が発行されました。本屋さんには出ていませんのでご希望の方は葉書にてご連絡ください。